

# 奈良県立医科大学 学報

January  
2009

vol.27

## CONTENTS

新年のご挨拶	1
早稲田大学との連携協力協定を締結	2
ホオジロ通信	3
教授就任挨拶 / 公開講座開催案内	4
医学教育シリーズ17	5
ベルツ賞受賞	6~7
【特別寄稿】弟のいのちをたずけてくれた人たち	8
先端研だより	9
職員提案 / 禁煙 / 産休・育休	10
シンポジウム開催報告 / 科研費追加採択 / 住居医学研究会 / 業務功労者表彰	11
附属病院から / 医療の最先端	12
病棟紹介 (B6・C5・C7)	13
白檀生祭開催報告	14
レポート	15
看護部から / 中島佐一賞の募集 / 臨床研修マッチング結果 / 下ツ道	16



平成21年 仕事始め式にて

## 新年のご挨拶

学長 吉岡 章

明けましておめでとうございます。新年にあたり教職員と学生の皆様に新年のご挨拶を申し上げます。

本学は今年、公立大学法人として3年目を迎えます。私は「夢」「喜び」「やりがい」の3Yを掲げて、昨年4月に理事長及び学長に就任いたしました。

昨秋には、文科省の質の高い教育GP（総合医療学 藤本眞一准教授）が採択されました。また、輸血部藤村吉博教授の「血栓症」グループが、医学領域で権威のある「ベルツ賞」受賞の栄に浴しました。双方とも、本学が創立60年余の地方の公立単科医科大学でありながらの、いや、そうであるからこそ、教育・研究・診療にかける教職員の意識と実績への高い評価、ご褒美でもあり、大変うれしく受け止めました。また、12月には早稲田大学との間に連携協定を締結いたしました。すでに、複数のプロジェクトが走り出そうとしていますが、今年はさらに多くの研究・教育面での連携活動が展開されるものと大いに期待しています。

新年にあたって、「愛校心（母校愛）」について考えてみたいと思います。どこの国でも地域でも学校でも「愛国心」や「郷土愛」、「愛校心」は尊重すべきものです。しかし、「奈良医大を愛する」ことを強制するような教育ではなく、「愛する奈良医大」を皆で創ることを教育と呼び、「愛校心」としたいと思います。奈良医大を愛する「愛校心」も、個人レベルの夢や運命からの本学入学や就職から出発し、大学や職場として毎日自らが目にする大学や病院から生まれて来ます。それは、大学や病院の建物や図書や機器等に始まり、教官・職員による教育や訓練、先輩・同輩・後輩との語り、クラブや仕事を通じての人間関係、そして、この大学を育てて来た明日香・檀原の地や大和の豊かな自然や歴史・文化への愛情・愛着から生まれてくるものです。大学にあっては、若い学生諸君はいつも私達教官や先輩のやり方や生き方を見ています。病院にあっては、患者さんは我々医師や看護師のやり方や生き方を見ています。まず、私達教職員が学生諸君に対して、また、医療者が患者さん達に対してお手本を示すことです。「医学教育・研究」の楽しさと厳しさを、「医療」という仕事の厳しさとやりがいを、そして、「患者さんを助ける」ことのやりがいと喜びを、全身で示しましょう。そこに奈良医大への「愛校心」は沸騰と生まれ育ってくるものと信じています。

# 早稲田大学と 連携協力に関する協定を締結

(研究推進課)



【調印式】早稲田大学 白井総長(左)と本学 吉岡理事長(右)

本学と早稲田大学は、平成20年12月22日に厳櫃会館において連携協力協定を締結しました。この協定は両大学が連携協力して教育研究活動の一層の充実と質の向上を図ることによって、学術の発展と有為な人材の育成に寄与することを目的としています。

本学と早稲田大学との連携協力事項は、次の5点です。

- (1) 教育に関する事項
- (2) 研究に関する事項
- (3) 産学官連携に関する事項
- (4) 地域社会への貢献に関する事項
- (5) その他本協定の目的を達成するために両大学が必要と認める事項

今後、医工連携を中心とした共同研究を推進し、その成果を社会に還元することで、社会に貢献することを目指していきます。

なお、早稲田大学は、同日に奈良県とも包括連携協定を締結し、次の6点について連携を行っていくことになりました。

- (1) 人材育成に関する事項
- (2) 学術研究及び教育に関する事項
- (3) 文化芸術に関する事項
- (4) 地域づくりに関する事項
- (5) 公共経営に関する事項
- (6) その他、本協定の目的に資する事項

## 「医学と工学の連携について」

附属図書館長（泌尿器科学 教授） 平尾 佳彦

本年度の文科省都市エリア産学官連携促進事業【発展型】に（財）関西文化学術研究都市推進機構を中核機関とする「ユビキタス生体計測ヘルスケアデバイス・システムの開発」が採択され、本学から産婦人科学教室の小林 浩教授と小生がプロジェクトリーダーとして参画しています。このユビキタス生体計測プロジェクトでは、何時でも何処でも誰もが「無意識下に、無拘束で、長時間、低侵襲」に日常生活動作に反映した生体計測データを測定し、BAN (Body Area Network) 環境下にデータベースに蓄積し、診断・治療・予防医学に活用するシステムを3年間で構築することを目標にしています。具体的には産科領域で「妊婦見守りシステム」、泌尿器科領域では「在宅排尿機能検査システム」の開発研究を行います。この開発研究は従来から試みられてきたテレメトリ測定を発展させ、LSIをはじめとするわが国の先端科学技術を駆使して、生体内挿入もしくは体表貼付する小さいデバイスを開発して生体情報を測定し、双方向通信システム網を構築します。

この研究は、従来の排尿機能検査法がカテーテルを用いることから、医療施設内に限定される単回検査が中心で、蓄尿機能より排尿機能を重視していることなどから必ずしも被験者の日常生活における排尿・蓄尿機能の評価に適さないことから、根本的な改革が必要と考えたことが発端になっています。このためには症状評価と下部尿路閉塞ならびに利尿筋収縮の生理的評価をユビキタスネットワークで行うために携帯式尿流量率測定機器、カプセル型膀胱・直腸内圧測定器ならびにこれらのデータと臨床症状を記録する電子排尿日記からなるシステムを企画しました。このシステムの実現には我が国の先端技術であるLSIとMEMS技術<sup>1</sup>を有機的に集結した産学連携が必須で、幸いにも文科省第1期知的クラスター事業に参加したことが、今回につながっています。この事業の達成には、1) 超低消費電力の双方向通信LSI、2) 生体計測に特化したプロセッサ、3) 医療電波法に適合する通信技術、4) 生体情報を抽出するMEMS、5) 長時間測定に適した微小電池、6) これらの実装を可能とする電子実装技術、7) 機器の駆動・データ解析のためのソフトウェアならびに8) システム全体を統括するBAN技術など、最先端の科学技術が必要で、一泌尿器科医の手に負えるものではありません。現在、都市エリア連携事業において、大阪大学、東京工業大学、奈良先端科学技術大学院大学などの多数の研究機関とオムロンヘルスケア、マイクロニクス社などの産業界が協力しており、ユビキタス生体計測システムの開発に邁進しています。

このプロジェクトでユビキタス生体測定のプラットフォームが確立されれば、微小計測装置であらゆる生体計測が可能になり、無意識下に、無拘束で、長時間、低侵襲に測定されたデータは生体情報の真のエビデンスとなり、診断・治療のみならず予防医学の発展に大きく貢献するものと確信しています。

夢の実現に向かってプロジェクトを立ち上げるまで、多くの大学、研究機関、企業などに働きかけ、参画をお願いしてきました。医療現場には多くのニーズがある、工学・産業界には医療者の想像を超えた技術がある、この有機的な連携が医療の向上、国民の健康管理に大きく貢献すると訴えてきました。我が国には一泌尿器科医の訴えにも快く協力してくれる多くの研究機関、企業があります。また、今回の研究に参加して実感したことは、開発研究を通じて人の輪・技術の輪が広い領域に加速度的に広がることで、この事業の多くの難関が克服できる目途が立ったことでもあります。医学・工学連携を進めることにより、それぞれの領域に新しい知見が生まれ、さらに医工連携の新しい学際的发展が推進されると考え、本学にもその機運が一層広がることを祈念しています。

1 MEMS (MicroElectroMechanical System) 機械要素部品、センサー、アクチュエータ、電子回路などを一つのシリコン基板上に集積化したデバイス



ホオジロ

### 【ホオジロ通信のいわれ】

ホオジロの鳴き声は「イッピツケイジョウツカマツリソウロウ(一筆啓上仕り候)」と聞こえるといわれます。本学教職員および関係者の皆様に一筆啓上仕るという意味で、この欄をホオジロ通信と名付けました。



# 教授就任あいさつ



基礎看護学 教授 藤田 比左子(ふじた ひさこ)

11月1日付で医学部看護学科基礎看護学を担当させて頂くことになりました藤田です。

私は、手術室・外科病棟での看護師の勤務経験がありますが、その後、企業で電子カルテ支援事業に従事していたことがあります。それが契機となり、筑波大学大学院人間総合科学研究科で、学位を取得し、以後、「看護学と情報活用」が現在の研究テーマです。

社会は、急速な情報技術の革新により、それは医療界にも波及しています。溢れる情報機器の使い方に翻弄されることなく、人間本来の情報活用に注目することが、学生教育においても思考力や判断力を育むことに繋がっていくと考えております。また、看護技術力の向上が求められる昨今、基礎看護学は特に重要な役割を担っており、より高い教育をめざして、看護学科そして奈良県立医科大学の発展に少しでも貢献できる仕事をしたいと考えています。何卒ご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



脳神経外科学 教授 中瀬 裕之(なかせ ひろゆき)

平成21年1月1日付けをもちまして、本学脳神経外科学講座を担当させて頂くことになりました。教室の伝統を受け継ぎ、脳神経外科教室ならびに大学の一層の発展に貢献すべく専心努力する所存です。

私は、昭和58年に本学を卒業し、外科学第二講座(内海庄三郎教授)に入局させて頂きました。本学附属病院の研修医を経て、大阪警察病院や(財)大阪脳神経外科病院などの施設の医員として脳神経外科のトレーニングを受けてきました。学位は、「てんかんの基礎的研究」で取得し、平成5年にドイツのマインツ大学神経病理学(O. Kempfski教授)に「脳静脈還流障害の研究」で文部省在外研究員として留学させて頂きました。専門分野は、脳卒中・脊髄脊髄・てんかん・脳腫瘍の外科的治療です。今後は、教育・研究・診療および地域貢献に最大限努力していきたいと思っております。

どうぞ、皆様の温かいご支援・ご協力をお願いいたします。



小児科学 教授 嶋 緑倫(しま みどり)

このたび小児科学教室担当に就任致しました。奈良医大と小児科教室の発展のために全力で貢献したいと思っています。

今、大学小児科に求められているのは高いレベルの研究を実施すること、高度な小児専門医療を提供すること、地域の小児医療に貢献すること、学生や研修医を教育すること、新たな小児科医を育成することだと認識しています。特に、教育は教室全体の共通課題として重視したいと思っております。研究では、小児科学教室の伝統である血液凝固学を基礎に遺伝子治療や細胞補充療法など臨床に還元できる研究をめざします。診療では血液、腫瘍、循環器、神経を専門領域としてレベルアップをはかり、さらに奈良県の小児医療にも貢献する所存です。

どれも簡単なことではありませんが、目標実現に向かって教室員が一丸となって一歩ずつ着実に進んでいきたいと考えています。そのためにも皆様のご指導・ご支援が不可欠です。何卒よろしくお願い申し上げます。

## 公開講座「くらしと医学」を開催します。

本学の地域貢献の一環として、下記のとおり開催します。皆様お誘い合わせのうえ、ぜひご聴講ください。

日時：平成21年2月21日(土) 13:00~15:30

場所：奈良県文化会館国際ホール(奈良市登大路町)

演者[予定]：第二内科学・吉川准教授、第一解剖学・東野教授、人間発達学・飯田教授

<http://www.naramed-u.ac.jp/aff/koukaikouza/>

## 専門職 profession の役割の変化

教育開発センター 教授 森田 孝夫

「医学教育シリーズ3」で「専門家professional」について触れました。“professional”の語源はラテン語の“profess(神の宣託)”からきており、神の宣託を人民に伝える者を“professional”といい“specialist(専門領域の熟達者)”とは区別されるということでした。

「専門職profession」と呼ばれた最初の職業は牧師でした。中世に誕生した大学は神学を研究し、牧師を養成する「神学校」の色彩が強いものだったそうですが、自然科学の発達に伴って、大学の役割も「真理の究明」と「解明された真理の実社会への還元」に変化してきました。そして、大学教授が“professor”と呼ばれるようになり、さらに医師、弁護士、教師が“professional”と呼ばれるようになったそうです。これらの専門職に求められたのは、一般市民では解くことができない「謎を解く」ことであり、真理を解明して社会に貢献することでした。医療の領域でも看護師、薬剤師、と現在ではさらに多くの専門職が存在していますが、社会貢献が求められている点は共通だと思います。

さて、「医学教育シリーズ14」に書かせていただきましたが、現代社会における専門職の役割は大きく変化し、専門職に対する根本的な問い直しが求められているということです。それは、例えば、法律家養成に新たに「法科大学院」が創設され、司法に市民が関与する「裁判員制度」が導入され、薬剤師教育が6年制に移行し、教師教育に「教職大学院」という新たな専門職大学院が創設され、さらに教員免許の更新制が導入されつつあること等の諸政策に現れています。

では、専門職の役割に変化が求められている背景について考えてみたいと思います。まず、インターネットの普及によって情報化社会となり、従来は専門家を介してしか入手できなかった情報が容易に入手できるようになったことです。次に、進学率の向上に伴う高学歴化が挙げられます。従来は専門家の手を借りなければ理解できなかった専門的な内容でも、一般の人が理解できるようになりました。このことは、現代は「専門家による知識の独占」が崩れたということを示していると思います。

一方、専門家のサービスを受ける側(クライアント)の権利意識の高まりを背景として、専門家に対する要求水準が高くなってきています。また、その内容も多様化してきており、専門家の専門領域を越えてしまうこともあります。つまり、かつての「パターナリスティック(父子主義的)な専門職像」ではクライアントは満足できない状況になっています。

では、現代の専門職に求められている役割とは何でしょうか？従来の専門家像を「特定の分野で学問的な知識・技術を身に付け、その分野の事象に精通している人」だとすれば、それだけでは不十分であるということです。現代の専門家には、高度な知見・技術とともに、クライアント(例えば、患者)との適切なコミュニケーション能力や他の専門職との協働性が求められています。クライアントの現実の課題にコミットしつつ、その課題に関わる他職種と連携し、当事者間に共通の理解や合意をもたらす役割を期待されているということなのでしょう。医療者としての専門職、学生を教育する教育者としての専門職、あるいはその両方を担う専門職など本学で働く専門職はさまざまですが、専門職とはいかにあるべきかを考えるときに来ているのだと思います。

# 輸血部 藤村吉博教授の 研究グループが ベルツ賞を受賞

輸血部 准教授 松本 雅則

第45回ベルツ賞2等賞が、本学輸血部 藤村吉博教授らの研究グループ（輸血部 松本雅則准教授、第三内科 植村正人准教授、小児科 杉本充彦講師）と国立循環器病センター研究所病因部 宮田敏行部長の研究グループ（脈管生理部 小亀浩市室長）の共同研究に対して授与され、11月19日に駐日ドイツ連邦共和国大使公邸にて贈呈式が行われました。奈良医大の関係者としてのベルツ賞受賞は初めてです。



ドイツ大使公邸にてBoehringer Ingelheim取締役会副会長  
Andreas Barner博士よりベルツ賞を授与される藤村教授と令夫人

ベルツ賞は、日独両国間の歴史的な医学関係を回顧するとともに、両国の医学面での親善関係をさらに深める意味で1964年に設立された歴史のある賞です。この賞は、日本の近代医学の発展に大きな功績を残したドイツ人医師ベルツ博士の名を冠して、正式には Erwin von Bälz 賞と名付けられています。ベルツ博士は、明治の初めに東京大学医学部の前身である東京医学校で教鞭を取られて、数多くの優れた日本人医学者を育てるとともに、公衆衛生面では日本の防疫事業の基礎を築くために尽力され、近代日本の黎明期に西洋医学を導入された指導者の一人です。

本賞は毎年特定のテーマについての医学論文を募集し、その中から優れた研究に対してベルツ賞1等賞と2等賞が贈呈されます。今年のテーマは「血栓症 - 最近の進歩」でした。藤村教授らの受賞論文のタイトルは「動脈血栓症の制圧：VWF-GPIb軸依存性血小板血栓形成を調節するADAMTS13の基礎・臨床病態解析」で、現在までに発表された約50編の関連原著論文をまとめたものです。

心筋梗塞や脳梗塞などの致死的な動脈血栓症の成因には、止血因子であるフォンビルブランド因子（VWF）と血小板受容体GPIbの過剰な結合反応が必須です。VWFのこの機能は分子量に依存し、高分子量VWFはより高い血栓形成能を持つことがわかっています。また、ADAMTS13はVWF特異的切断酵素で、VWFの分子量を減じることで、過剰なVWF-GPIb結合を制御しています。藤村教授らのグループは、1980年代にVWFの構造機能解析にて、同分子内のGPIb結合ドメインを同定し、その後、フローチャンバーシステムを用いて動脈内での血流状況をin vitroで再現することに成功し、結果として、高ずり応力下のVWF-GPIb軸依存性血小板血栓形成メカニズムの解明に大きな貢献をしました。また、1998年にADAMTS13の活性測定法を本邦で最初に確立し、原因不明の慢性血小板減少症であるUpshaw-Schulman症候群(USS)がこの



ADAMTS13活性の先天性欠損症である事を明らかにしました。さらに、血栓性微小血管障害症（TMA）解析センターを開設し、2008年4月までに登録し得た日本国内のTMA症例数は882例（うち37例はUSS）で、この膨大なTMAデータベースは世界的にも比類なきものになっています。また、これらUSS 37例で遺伝子変異と臨床所見の解析を行い、USS患者の妊娠時には、全例妊娠中期以降に血小板減少を認め、TMAを発症するという驚愕の事実を明らかにしました。次に、初期のADAMTS13活性測定法が、手技的に困難で、長時間を要するものであったため、簡便な同酵素活性測定法の開発を行いました。そのために、まずADAMTS13によって切断されるVWFの最小基質がVWF-A2ドメイン内の73アミノ酸残基であることを同定しました。この基質を用いて2つの簡便なADAMTS13活性測定法を開発し、これらは市販キット化され全世界で広く使用されています。簡便なADAMTS13活性測定法の導入によって、TMA以外にも肝硬変、肝移植、重症膵炎など多彩な病態において、ADAMTS13とVWFの量的不均衡が血栓症を引き起こすことが明らかになっています。

このようにVWF基礎研究、先天性ADAMTS13欠損症の発見とその遺伝子解析、ADAMTS13産生細胞の同定、迅速ADAMTS13活性測定法の開発、膨大なTMAデータベースの構築を通じて、多彩な動脈血栓症の病態を明らかにしたことで、その予防や治療法開発に大きく貢献することが予想されるため、ベルツ賞が授与されたものと考えています。

なお、今回の受賞論文の共著者には加わって頂いておりませんが、USSの臨床知見についての貴重な情報を頂いた本学小児科学前教授（現学長）吉岡章先生をはじめ、ADAMTS13モノクローナル抗体作成には本学先端医学研究機構の森俊雄准教授と岩本顕聰研究員、ADAMTS13産生細胞の同定には本学第二解剖学の和中明生教授と辰巳晃子講師、生体肝移植症例の解析には本学消化器・総合外科学の中島祥介教授と高済峯准教授、また多数の慢性肝疾患の解析には本学消化器・内分泌内科学の福井博教授らに御協力いただきましたので、この場を借りまして心より感謝申し上げます。



駐日ドイツ連邦共和国大使 Hans-Joachim Daerr閣下と受賞者一同：  
右から植村正人先生、藤村吉博先生、宮田敏行先生、Daerr閣下、杉本先生令夫人、杉本充彦先生、小亀浩市先生、藤村先生令夫人、著者夫妻（ドイツ大使公邸庭園にて）





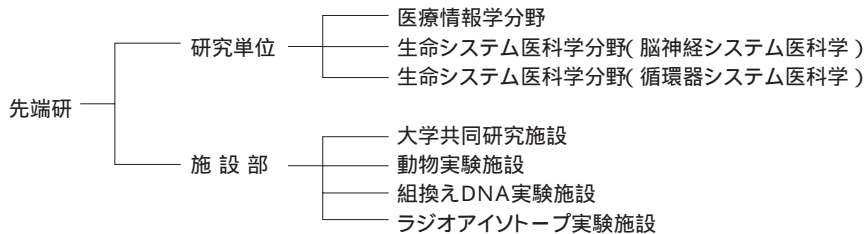
## 機構長あいさつ



21世紀になって科学技術の発展は著しく、特に生命領域の日々の進展には目を見張るものがあります。私どもの大学は、世界に誇れる最先端の独創的研究を推進すべく先端医学研究機構を設けています。今、研究単位は生命システム医科学の2教室と医療情報学の計3教室であり、間もなく4つ目を設ける予定です。また、4つの研究施設を備えていることから、研究単位との共同研究および研究施設の有効利用を通じて、奈良医大としての特徴ある研究成果を生み、古都の奈良の地から新しい情報を発信していきたいと思っています。私たちの規模の大学では、人海戦術や資金面でなかなか厳しい面もありますが、個人の発想に関しては正面切った勝負が可能です。先端医学研究機構としては、個人の発想と共同研究を通じて、日本のみならず世界での誰それと言われるような研究成果があがるための仕組みづくりに力を入れていきたいと思っていますので、よろしくお願いたします。

研究部長（化学 教授） 大崎 茂芳

「奈良県立医科大学先端医学研究機構（略称：先端研）」とは、本学において、これからの時代の要請に応える独創的な研究成果を発し、かつ臨床応用等を行うことによって地域社会に貢献するとともに、高度な医学研究用及び教育用設備機器類を有効活用できるように配置し医学の研究及び教育の向上を図ることを目的に平成16年度に設置され、現在、研究単位として、「医療情報学分野」、「生命システム医科学分野（脳神経システム医科学）」、「生命システム医科学分野（循環器システム医科学）」があり、また、施設部として、「大学共同研究施設」、「動物実験施設」、「組換えDNA実験施設」、「ラジオアイソトープ実験施設」があります。



今回は施設部の紹介をします。

### 各施設（施設長）より

動物実験施設 病理病態学講座 教授 小西 登

動物実験施設を担当しております病理病態学の小西です。動物実験が医学研究並びに教育に不可欠であることは言を俟たないことですが、近年は特に動物福祉の観点から3R(Replacement, Reduction, Refinement)の履行が求められております。生命への畏敬の念をもって動物実験にあたっていただきたく切望しております。

DNA実験施設 寄生虫学講座 教授 石坂 重昭

遺伝子組換え研究の増大に伴い、特に組換え動物実験の増加に対応し動物施設のご協力により動物施設全室にネズミ返しを設置して頂きました。また、実験者の増加に対し、施設外の9教室または研究単位をP1室と認定いたしました。現在、117件の組換えDNA実験が承認、届出され、202人の実験従事者が登録されております。本施設での研究がさらに世に貢献できますよう願っております。

RI実験施設 生物学 教授 大西 武雄

本施設は、放射線障害防止法に則り、研究者はもちろん周辺住民の安全を十分に配慮した設計・運営がなされています。また、医学研究を支援するため、多くの最新の大規模実験機器を配置すると共に、一日24時間利用できる態勢を整えています。現在、43研究室の224名がRI使用登録をしています。安全で、便利な本施設の更なるご利用を期待しています。

大学共同研究施設の施設長は、機構長（あて職）です。

### 各施設主任から一言

実験動物管理者 講師 久保 薫

実験動物管理者の久保です。今日、動物福祉の理念の基に3Rの原則並びにCost（動物が被る苦痛）とBenefit（ヒトへの恩恵）のバランスに配慮した動物実験が求められております。このため実験動物の種の選定、遺伝学的・微生物学的統御と飼養条件、苦痛軽減の方法や動物実験技術の情報提供は動物実験施設の重要な役割と考えております。

組換えDNA 実験施設管理者 准教授 杉浦 重樹

平成20年度共用備品としてStepOnePlus Real Time PCR System (Applied Biosystems) が2台配備されました。使用に当たっての取り決めやマニュアルをホームページ：<http://top.naramed-u.ac.jp/dna/kikisiyou.htm> からダウンロードできます。また組換えDNA実験に関する手続等について簡単に解説したページもありますので、関心のある方はホームページをご覧ください。

RI実験施設管理者 准教授 森 俊雄

本施設では15種類のラジオアイソトープが使えます。例えば、<sup>3</sup>H-チミジンを用いれば、細胞の増殖能やDNA合成能を正確に簡単に測定できます。蛍光や化学発光を用いた実験もできます。そのため、共焦点レーザー顕微鏡やフルオロイメーリアナライザーなど多くの機器を配置しています。施設の利用には教育訓練が必要ですのでご連絡下さい。

先端研次長(研究推進課長)の池谷仁宏です。これからも先端研の更なる充実に努めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。なお、先端研の事務局は、研究推進課研究推進係(基礎医学校舎4F)です。お問い合わせは、内線2554、2556までお願いたします。

これからも情報発信をしていきますのでよろしくお願いたします。

## 咲かせよ提案の花 ～職員提案授賞式

昨年11月25日、平成20年度職員提案制度の授賞式が実施されました。

この制度は、「みんなで知恵を出し合って大学・病院を良くしていこう!」という趣旨で法人化してから初めてできた制度です。

最優秀賞には5万円、優秀賞には1万円が贈呈されるなど、職員の経営改善に対する姿勢を高く評価する内容で、経営改善のための一方策としての効果が期待されています。

授賞式の開催場所は学長室。47件の提案の中から選ばれた最優秀賞2件、優秀賞5件の提案の提案者が出席しました。

まず、賞状と副賞の授与があり、その後、理事長から、それぞれの提案内容について1件ずつコメントがありました。

理事長のコメントの中で印象に残ったのは、「提案を実現に結び付けていくことが大事。実現の過程では困難もあると思うが、みんなで協力して実現していきたい。」という言葉。教職員一丸となって大学・病院を良くしていこうという理事長の強い意志を感じました。

職員提案受賞一覧(最優秀賞・優秀賞)

賞	提案部門	提案者(代表者)	提案名
最優秀賞	病院	集中治療部 平井 勝治	医療コストを知らう
	経営その他	財産管理課 山本 貴弘	学内FAX(直通)回線のダイヤルイン回線化
優秀賞	教育・研究	総務課 長尾 幹	出前講義の実施
	病院	看護部(B5) 西浦 聡子	看護師の白衣・靴の支給について
	病院	病院管理課 植松 聡	定期環境整備
	経営その他	研究推進課 久保 英樹	大学構内及び周辺の美化活動の推進
	経営その他	学務課 山岸 英之	物品調達部署の一元化



受賞者のみなさん(理事長を囲んで)

～職員提案の詳細は学内HPで見ることができます～  
学内HPTトップページ>総務課>職員提案

<http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/soumuka/teian20.htm>

## 禁煙パトロールにご協力いただきありがとうございました!

平成20年4月1日より実施している敷地内全面禁煙を、より実効あるものとするとともに大学関係者の禁煙意識の更なる醸成を図るため、11月17日(月)から12月26日(金)までの28日間、禁煙パトロールを行いました。

今回の禁煙パトロールは、病院長、各副院長をはじめ、学内各部署からの協力を得て、一定の成果をあげることが出来ました。皆さんご協力ありがとうございました。

さて、禁煙パトロールはひとまず終了いたしました。まだまだ、敷地内での喫煙、吸殻のポイ捨てが見受けられることから、今後も引き続き『マナーの向上』を呼びかけていく必要があると考えます。

**教職員、学生及び関係の皆さん、敷地内で喫煙している人を見かけたら「敷地内は全面禁煙となっておりますので、ご協力をお願いします。」と一言、声かけをお願いします。**

### 本学における禁煙の趣旨

- (1) 病院は、健康をサポートするという社会的な役割を担っており、また、病気やけがを治し、健康を回復してもらう場所であること。
- (2) 喫煙が、がんや生活習慣病等の重大な危険因子であることは言うまでもなく、予防医学、受動喫煙防止の観点から、入院患者さんを始めとした来学される全ての皆さんの健康を守ることを目的として敷地内禁煙を実施していること。



みんなで「声かけ」をお願いします。

## 育児休業に伴う代替教員の採用について

本学では、法人化後、教員が育児休業を取得することに伴い、その育児休業期間中に代替の教員を雇用できる制度が整備されています。

この制度は、教員から育児休業の申出があった場合において、他の教員の配置換えなどの方法では、育児休業の申出をした教員の業務を処理することは困難であることが多いため、その育児休業期間を限度として、代替教員を採用することができるものです。

現在、本制度を利用して4名の教員が採用されており(平成20年12月現在)、教員が育児休業を取得しやすい環境を整えています。

なお、代替教員の雇用は、産前・産後休暇期間(最長、出産予定日の6週間前から出産日の8週間後)についても認められる場合があります。

## 奈良県立医科大学・同志社女子大学学術交流に関する包括協定締結記念 同志社女子大学との第2回シンポジウムを開催しました！

『チーム医療のあり方を考える ～メタボリックシンドローム対策を中心に～』

平成20年12月20日(土)に本学と同志社女子大学との共催によるシンポジウムが、本学大講堂において開催されました。

テーマは、今話題のメタボリックシンドロームを取り上げ、基調講演の後、チーム医療を担う医師・薬剤師・保健師・管理栄養士が各職種の立場からそれぞれ話題提供をいたしました。最後の総合討論では、会場からの意見・質問も交えて活発な論議が行われました。



本学から吉栖教授(薬理学)、斎藤教授(第1内科)が参加

## 平成20年度において、文部科学省 科学研究費補助金の追加採択がありました。

研究種目	所属	職名	氏名	研究課題	研究期間
特別研究促進費	生命システム医科学	教授	中川 修	新規リン酸化酵素の骨格筋疾患における病態生理学的意義の研究	20~22
基盤研究C	中央臨床検査部	講師	山崎 正晴	肝硬変腹水病態への腹腔マクロファージおよび反応性中皮細胞の関与	20~22
基盤研究C	第二内科学	講師	吉川 雅則	慢性閉塞性肝疾患の全身性炎症における肺-消化管ネットワークの意義	20~22
基盤研究C	小児科学	講師	田中 一郎	抗第 因子インヒビターに対する免疫療法の効果発現機序に関する研究	20~22
基盤研究C	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	助教	太田 一郎	頭頸部がんにおけるmTOR阻害薬による放射線増感効果の基礎的研究	20~22

## 第25回住居医学研究会を開催します！

日時	平成21年2月26日(木) 16:00~17:30
演題	カオス・フラクタル感性情報計測
講師	長岡技術科学大学工学部電気系情報通信システム工学講座 情報処理センター長 中川 匡弘 教授
会場	基礎医学学校舎5階会議室

(総務課)

## 平成20年度医学教育等関係業務功労者表彰

大学における医学についての教育、研究、患者診療等に関する業務について、特に顕著な功労があったとして、11月28日に本学の次のお二人が文部科学大臣から表彰されました。

宮中 勝子(看護部)

西岡 光治(栄養管理部)





# 病棟紹介

## B棟6階 消化器・一般・小児外科病棟



B棟6階病棟は消化器・一般・小児外科の病床数52床の病棟です。2チームの固定チームナーシングにより看護を行っています。

代表的な疾患は、食道癌・胃癌・肝臓癌・大腸癌・膵臓癌、乳癌や小児の鼠径ヘルニアがあげられます。

外科病棟であり、術前・術後の患者さんの全身管理やケアを行っています。また、ターミナルステージを迎えられている患者さんもおられ、スタッフが力をあわせて、看護を行っています。回復されていく患者さん、ターミナル期にある患者さんにかかわり、看護師としての多くの喜び、厳しさ、楽しさの経験を積むことができる病棟です。

## C棟5階 神経内科・口腔外科・麻酔科病棟



C棟5階病棟は、神経内科・口腔外科・麻酔科の混合病棟です。

神経内科では主に脳血管障害や脳炎、パーキンソン病、ALSなど、口腔外科では口腔顎顔面領域の良性及び悪性腫瘍、顎関節症、口唇口蓋裂などの患者さんが入院されています。麻酔科では帯状疱疹や脊椎疾患などの患者さんがブロック治療目的で入院されています。この病棟では内科系・外科系の看護が行われており、患者さんも乳幼児から老年期まですべての人が対象となります。また急性期から慢性期、ターミナル期と幅広い看護を行っているのが特徴です。看護師総数25名みな明るく元気に、意見を出しながらよりよい看護を提供できるように日々努力しています。

## C棟7階 循環器・腎臓・代謝内科病棟



C棟7階病棟は、循環器・腎臓・代謝内科病棟です。急性期から回復期、慢性期、時には終末期まで幅広い看護を実践しています。生活習慣病に関連した疾病が多く、患者さんの自己決定や行動変容を目的に、ウォーキングカンファレンスを活用した患者参加型の看護をめざしています。また、心臓・腎臓・糖尿病チームに分かれ、看護の質向上を目指した活動を行っています。

患者さんに“気持ちのいい看護”を提供することにより、私たち看護師も達成感や充実感がもてるよう頑張っています。緊張感満載の病棟ですが、患者さんからの「ありがとう」の一言が私たちのパワーの源です。

## 平成20年度 奈良県立医科大学 白檀生祭 シンポジウム ～笑顔と喜びを届けるホスピタルクラウン～

(シンポジウム委員一同)

平成20年度のシンポジウムはホスピタルクラウンをされている大棟耕介さんをお呼びして、午前中に小児科病棟にてホスピタルクラウン、午後から講演会をしていただきました。ここでホスピタルクラウンというのは、病棟で患者さんに自分らしい時間を少しでも取り戻してもらうために活動する道化師のことを指します。

午前中の小児科病棟において、今回特別に学生1人が大棟耕介さんと一緒にホスピタルクラウンを体験することになりました。ホスピタルクラウンは本当にすばらしく、患者さんだけでなく、そのご家族や医療スタッフにまでも笑いとお顔を満たしてくれました。これがプロのなせる業なのです！

午後の講演会も笑いとお感動で、時間がすぎるのを忘れてしまう勢いでした。来聴者の感想は、「すごくよかった！」「また来年も大棟耕介さんをよんで！」といった具合です。今回のシンポジウム企画に携われたことをスタッフ一同、誇りに感じています。ありがとうございました。



ホスピタルクラウン大棟耕介さんと一緒に

## 同志社女子大学からも参加がありました

(研究推進課)

昨年11月1日、「白檀生祭」に同志社女子大学から3名の学生さんらが訪れました。

これは本学と同志社女子大学で締結している学術交流に関する包括協定の一環として、お互いの学園祭に参加し、学生間の交流を図っているものです。

同志社女子大学の皆さんは、学長を表敬訪問し、模擬店や展示コーナーを見学した後、メインステージから同志社女子大学の大学祭「EVE」のアピールを行いました。今後、より交流を深めていく中で、新たな出会いや気づきがあることを期待しています。



学長を表敬訪問



メインステージにて



# Report

承認された規程、委員会名簿等については、随時、ホームページにて公開しています。

学内ホームページURL（閲覧は学内のみ可能）

<http://top.naramed-u.ac.jp/>

「規程・名簿タブ」

公開ホームページに掲載

<http://www.naramed-u.ac.jp/aff/johokoukai/>

（総務課）

## 役員会及び教育研究審議会の報告

### 第27回 役員会（10月1日）

- 1 8月末現在の財務状況を報告
- 2 看護職員採用試験結果を報告
- 3 グローバルCOEプログラムの審査結果を報告
- 4 質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）に採択された旨報告
- 5 事務職の最終合格者を決定
- 6 医療職の最終合格者を決定

### 第28回 役員会（10月8日）

- 1 大学院の充実について、大学院医学研究科博士課程委員会において協議を行うことを承認
- 2 教育研究審議会（10/9）予定案件を確認
- (1) 発明届について
- (2) 教授選考に係る基本方針（第一解剖学及び整形外科）について
- (3) 臨床教授等の選考について
- (4) 教員の人事について
- (5) 特別研究学生交流に関する協定書（案）について
- (6) 医の倫理委員会規程の一部改正（案）について
- 2 平成20年度決算見込を報告
- 3 医学部定員増に係る文部科学省ヒアリング結果を報告
- 4 医療事務講座の受講予定を報告

### 第11回 教育研究審議会（10月9日）

- 1 小児科学・杉本講師より提出された発明届について、特許等を受ける権利を法人が承継しないことを決定
- 2 共用試験（CBT）受験料について、学生の負担とすることを承認し、役員会に提案
- 3 第一解剖学及び整形外科の教授候補者の選考に係る基本方針を答申
- 4 皮膚科学教室より推薦のあった臨床准教授の選考を決定
- 5 11月1日付け教員人事を承認し、役員会に提案
- 6 京都大学大学院と本学大学院間における特別研究学生交流に関する協定書及び覚書の締結を承認し、役員会に提案
- 7 医の倫理委員会規程の一部改正を承認し、役員会に提案
- 8 医の倫理委員会委員の選任を報告
- 9 外国人客員研究員の受入れ期間変更を報告
- 10 グローバルCOEプログラムの審査結果を報告、今後の採択に向けての参考として活用することとしたい旨説明
- 11 平成20年度決算見込を報告
- 12 チェンマイ大学との学術協定に基づく派遣研究員として、生物学・大西教授、第一解剖学・東野教授の2名の派遣が国際交流委員会において決定された旨報告
- 13 先端医学研究機構からの要望として機構長名で要望書が提出された旨報告
- 14 質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）に採択された旨報告
- 15 職員提案制度の応募状況を報告
- 16 医学部定員増に係る文部科学省ヒアリング結果を報告
- 17 平成21年度医学科定員増に対する入学試験区分（案）として「後期日程・地域枠」において5名の増員を図ることを承認し、役員会に提案

### 第29回 役員会（10月9日）

- 1 共用試験（CBT）受験料の取り扱いについて、平成21年度から学生負担とすることを決定
- 2 第一解剖学及び整形外科の教授選考に係る基本方針を決定
- 3 11月1日付け教員の人事を決定
- 4 京都大学大学院と本学大学院間における特別研究学生交流に関する協定書及び覚書の締結を決定
- 5 医の倫理委員会規程の一部改正を決定、10月9日付けで施行
- 6 平成21年度医学科定員増に対する入学試験区分として「後期日程・地域枠」において5名の増員を図ることを決定

### 第30回 役員会（10月22日）

- 1 系統解剖に係る実習見学受入料として、平成21年度から1000円/回の徴収を行うことを決定
- 2 後期研修医募集要項を決定、10月23日付けで公募開始
- 3 （仮称）奈良県立医科大学FD委員会の設置について、次回教育研究審議会に提案することを決定
- 4 県の人事委員会勧告の内容について報告
- 5 産科医学学生支援奨学金希望者の推薦について、財団法人大阪コミュニティ財団より奨学生の推薦依頼があった旨報告
- 6 看護職員採用試験の合格者を決定

### 第31回 役員会（10月29日）

- 1 公益通報に関する規程及び就業規則の一部改正を決定、10月29日付けで施行
- 2 9月末現在の財務状況を報告
- 3 中期計画及び平成20年度年度計画の取組み状況報告

### 第32回 役員会（11月5日）

- 1 医療職の追加採用試験の実施を決定
- 2 教育研究審議会（11/6）予定案件を確認
- (1) 臨床教授等の選考について
- 3 平成21年度年度計画の策定準備を報告
- 4 10月31日付け教員の退職を報告
- 5 科学研究費補助金の追加内定について報告

### 第12回 教育研究審議会（11月6日）

- 1 大学における実習生の受入れに伴う取扱要領の一部改正を承認し、役員会に提案
- 2 （仮称）奈良県立医科大学FD委員会の設置を承認し、役員会に提案
- 3 病理診断学教室より推薦のあった臨床教授の選考を決定
- 4 10月31日付け教員の退職を報告
- 5 中期計画及び平成20年度年度計画の進捗状況を報告
- 6 平成21年度年度計画の策定準備を報告
- 7 科学研究費補助金の追加内定を報告
- 8 医学部定員増に係る手続き等について届出を受理する旨の内示があった旨報告

### 第33回 役員会（11月6日）

- 1 大学における実習生の受入れに伴う取扱要領の一部改正を決定し、平成21年4月1日付けで施行
- 2 奈良県立医科大学FD委員会規程を制定し、11月6日付けで施行

### 第34回 役員会（11月12日）

- 1 職員提案に係る授賞提案を決定
- 2 長期収支見込みについて検討、継続審議

### 第35回 役員会（11月26日）

- 1 看護師専用宿舎の確保を進めることを決定
- 2 FD委員会委員の選任を報告
- 3 学務委員会にて産科医学学生支援奨学生推薦者が決定された旨報告
- 4 看護職員採用試験の合格者を決定

### 第36回 役員会（12月3日）

- 1 短期借入金の実施を決定
- 2 早稲田大学との連携協定について、次回教育研究審議会に提案することを決定
- 3 教育研究審議会（12/4）予定案件を確認
- (1) 発明届について
- (2) バイオセーフティ委員会委員の改選について
- 4 10月末現在の財務状況を報告
- 5 12月31日付け教員の退職予定を報告

### 第13回 教育研究審議会（12月4日）

- 1 住居医学准教授より提出のあった発明届について、特許等を受ける権利の承継を決定
- 2 バイオセーフティ委員会委員の選任について、学長一任を承認
- 3 早稲田大学との連携協定の締結を承認
- 4 12月31日付け教員の退職予定を報告
- 5 FD委員会委員の選任を報告
- 6 産科医学学生支援奨学金希望者の推薦を報告
- 7 不適正支出の有無に関する調査について協力を依頼

### 第14回 教育研究審議会（12月9日）

- 1 脳神経外科学教授候補者として中瀬裕之氏を、小児科学教授候補者として嶋緑倫氏を、それぞれ承認し、役員会に答申

### 第37回 役員会（12月9日）

- 1 脳神経外科学教授として中瀬裕之氏を、小児科学教授として嶋緑倫氏を正式に決定、発令日を平成21年1月1日付けと決定

### 第38回 役員会（12月10日）

- 1 早稲田大学との連携協定に関する協定書（案）を決定
- 2 看護学科4回生の進路希望調査結果を報告

### 第39回 役員会（12月17日）

- 1 腫瘍センター運営委員会規程、がん化学療法レジメン委員会規程の一部改正を承認し、12月17日付けで施行

### 第40回 役員会（12月24日）

- 1 医学科同窓会による海外留学助成金授賞候補者の選考方法を承認
- 2 看護職員採用試験の合格者を決定

## 看護部から 認定看護師の仕事『腫瘍センター(外来化学療法室)』のご紹介

がん化学療法看護認定看護師 木村 道子

当院では7人の認定看護師が、それぞれの分野で活動を行っています。今回は、「がん化学療法看護認定看護師」が活動の拠点としている『腫瘍センター(外来化学療法室)』と、その活動内容についてご紹介します。

2005年4月に外来化学療法室が開設されてから、利用する診療科が増えると共に患者数も激増しました。また、外来化学療法加算の改定も伴って、2008年4月に外来化学療法室は『腫瘍センター』と改名されました。現在は、ベッド10床と小児用フロアの規模で、延べ約350人/月の化学療法を実施しています。スタッフは、専任医師1名、専任薬剤師4名、専任看護師3名(がん化学療法看護認定看護師1名を含む)です。外来における化学療法を安全・安楽に実施すると共に、化学療法を受ける患者と家族がその人らしく生活することができるよう、チームで取り組んでいます。その中でも看護師の役割としては、実際の投与管理と副作用観察やそれに応じた対応策の考案・指導などが中心となります。がん化学療法看護認定看護師は先に述べた看護師の役割意外に、がん化学療法のレジメンを統一・登録制にするために腫瘍センター主催で開催されている「がん化学療法レジメン委員会」のコア会議・本会議への参加、また、スタッフミーティングや看護師ミーティングも行ない、腫瘍センターの運営・業務の改善に取り組んでいます。今後は都道府県がん診療連携拠点病院として、腫瘍センター主催の、がん化学療法に関する定期的な勉強会の開催を行っていく予定です。また、様々な副作用の対応策を専門チームで検討して、マニュアル化する試みを開始しました。

腫瘍センターではウイッグの見本や、各種パンフレットを提示しています。必要に応じて各科外来や病棟でも活用していただきたいと思います。お気軽に、見学にお越し下さい。

腫瘍センター(外来化学療法室) 内線3307



## 平成20年度中島佐一学術研究奨励賞の募集

募集期間	平成21年1月30日(金)まで
募集要項	学内ホームページに募集要項及び申請書を掲載しています。 学内専用 研究推進課 研究助成金について 中島佐一学術研究奨励賞 <a href="http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/kenkyu/nakajima.htm">http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/kenkyu/nakajima.htm</a>
応募資格	・奈良県立医科大学医学部医学科の若手教員(原則として申請時に45歳未満の者とする。) ・1教室につき1名(附属病院中央部門に勤務する教員については、その出身する教室に所属するものとみなす。)
受賞者数	原則2名
副賞	研究奨励金を授与(1人につき30万円予定)

## 平成21年度 奈良県立医科大学附属病院群臨床研修プログラム別マッチング結果

	奈良医大病院研修プログラムA (医大附属病院だけでローテートするプログラム)	奈良医大病院研修プログラムB (医大附属病院と協力型病院をローテートするプログラム)	計 (人)
募集定員	50	20	70
マッチング	35	8	43
うち本学学生	31	8	39

### 下ツ道 (編集後記)

新年あけましておめでとうございます。  
今号には、輸血部 藤村吉博教授研究グループのベルツ賞の受賞を取り上げています。先生のこれまでの研究・努力の結果が、今回のベルツ賞の受賞という形で実を結んだことは、大変喜ばしいことであり、また、日々研究を重ねる我々にとっても励みとなりますね。奈良医大で初でもあるこの受賞を心よりお祝い申し上げます。

今後学報では学会での論文賞等の受賞の状況についても掲載する予定です。皆様の一層のご活躍を期待しています。本年もよろしくお祈りします。

掲載希望の記事等については、各編集委員までお知らせください。

今村 知明(健康政策医学)  
大西 健(生物学)  
粕田 承吾(法医学)  
植村 正人(内科学第三)  
中島小乃美(成人看護学)  
澤 清美(看護部)  
福留 隆二(研究推進課)  
芳倉 亮(学務課)  
北村 好伸(病院管理課)  
鷹野 覚(総務課)  
(印は編集委員長)